2017年度白川町・東白川村ORT報告会

自然と向き合い、挑み、巡る

～名古屋大学大学院の学生・教員はこの地域をどう生かす～

12月16日（土）　白川町町民会館大研修室（白川町）

名古屋大学大学院環境学研究科では、今年度白川町と東白川村を対象とした持続可能な地域づくりを研究しています。現地調査を重ねることで本当の地域課題を見つけることを重要と考え、白川町と東白川村に何度も調査に訪れました。6月、7月には東白川村で現地研修が行われ、滞在中には母樹林見学や森林組合など木材関連の事業所を訪問したり、美しい村づくり委員会が行っている集落あるきにも参加しました。その後も何度も現地調査に赴き、地域課題の調査と解決策を研究してきました。

名古屋大学大学院生による「地域の具体的な課題」を対象とした現地での実践的手法による研修成果の発表会が行われ、関係者などを含め50名を越える方が参加しました。本村からは村議会議員、美しい村づくり委員、役場職員、また現地調査で村の案内役を務めた方など約20名が参加しました。

●ラオス農村部から考える東白川村の可能性 ～若者をとりまく環境～

●ラオス農村部における生活づくりの特徴

ラオスの農村における現状から東白川村の地域課題を解決するヒントがあるのではないか？このような視点で2つのグループが発表をおこないました。

ラオス人民民主共和国は東南アジアのインドシナ半島に位置する共和制国家で、海と接しない内陸国です。主要産業は農業で人口の78％が従事し、GDP（国内総生産）の41％を占めます。

ラオスでは伝統的な農業の在り方が大きく変化している時期で、政府主導の有機農業やNGO支援による地域資源の活用（竹細工）に取り組むなど世界からの要求への対応を垣間見ることができます。また農村部に若者人口が多い現状を調査し、課題解決のヒントとして子育て環境の充実やI・Uターンで戻ってきた若者の能力を生かせる仕事を創出することなどを提案していました。

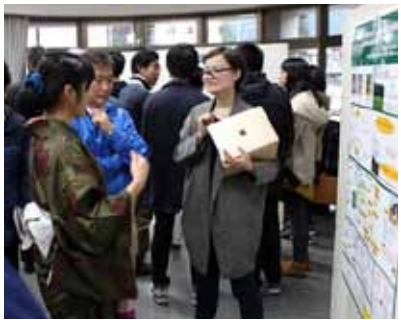
●持続的な中山間地域のための森林資源の価値連鎖 ～東白川村の事例から～

東白川村のお茶畑と山の風景に感動して、この風景を持続的に守るには？をテーマにしていました。村の林業の事例から、連携した林業活動の更なる「森林」の価値連鎖の必要性、社会のニーズの掘り起こし、それを具現化した商品やサービスをつくり上げるチーム力の向上の必要性を発表しました。

●バッファーゾーンの設置・管理を通した地域づくりの提案 ～白川町～

獣害による農作物への被害やその要因について調査し、バッファーゾーンの設置・管理を通して、住民と行政が林業・農業・地域環境について話し合うことによる地域課題解決の可能性について発表しました。

以上の4グループの発表後、学生と参加者による質疑応答も活発に行われていました。



興味ある研究について学生に質問

後半は「自然に囲まれた地域の生きる道筋」と題して、総合討論が行われました。それぞれ社会的立場の違う大学教授、住民、行政、大学生の9名で熱い討論が交わされ、いくつものキーワードが出ていました。

東白川村の案内役を務めていただいた二人に発表の感想を伺うと、アイデアを実行する難しさ、新しい事にチャレンジした若い時の思い出をいくつも語ってくださいました。

地域も社会的立場も超えて、学生の教育に触れる多様性の未来を学生や参加者の笑顔から感じる機会となりました。